

芥川だより

発行日 ***2016年5月1日 e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集発行人 下村嘉明

発行所

☆ 着物から服へ

着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2 -1 4 -3

TEL072-681-8870



***** 一部100円です *****

連載小説 負けるな！よっちゃん

大峯奥駈道 1



歴史は簡単に塗り替えられる。誰も自分を悪者にしたくない。出来れば人に好かれるヒーローにしたい。たとえヒーローになれなくても稀有な存在としての自分を誇示したいと思っている。権力者が歴史を自分に都合よく編纂するのはこのためである。真実を知るのは簡単ではない。多くのことが葬り去られているからである。

これから書く物語もその例にもれず、よっちゃんの独断と偏見によって書かれている。自分に都合よく脚色されているので、そのところはご容赦頂き賢明なご想像をお願いしたい。

退院して3年、もうすっかり病気の事など忘れてしまったような浮かれたよっちゃんである。多くの人や家族に心配や迷惑をかけたことを忘れてしまっていた。そんなよっちゃんが、大峯山の修験道・奥駈を縦走しようと考えたのである。かなり無茶な計画ではあったが、実際に歩いてみて考え得たものは大きかった。「なんや、そんな事も分からなかったのか！」と失笑を買うのを承知で言えば、よっちゃんがこれまで迷っていた諸々を霊峰の風が吹き飛ばして明確な生きる道を見つけられたからである。

物語は、よっちゃんが退院した年末から始まる。芥川だよりに寄稿してくれている友人が年末に芥川だよりの軍資金の一部にと金を送ってきてくれたのである。さっそく、芥川だよりの編集を手助けしてくれている山の後輩である大江君を招いて二人で忘年会をした。その席で彼が正月に愛宕山に登ると言う。退院後まもないよっちゃんは、酒の勢いで「一緒に行っていかな」と聞くと、かまいませんよ、と言ってくれたので登ることにした。しかし、大江君だけに迷惑をかけられないので、その場で友人の熊五郎君に電話すると、彼も毎年正月の2日に登っているから2日なら付き合ってくれるという。二人が付いてくれれば、たとえ登れなくても何とかしてくれる。なんとも無責任なよっちゃんであったが、すべては、ここから始まったのである。

死をめぐるあれやこれ (20)

石川 吾郎

父の松

私の実家の中庭には一本の松の木があった。なかなか枝振りのよい黒松で、私の子供のころすでに樹齢百年にはなっているだろうと教えられた。この松は父の自慢でもあった。

私は十八才になって大学に進学し、実家を出て関西に住むようになったが、休みに帰省するたびに、庭の松の姿を見たものだ。それは家族のように親しいものだった。

時は経ち私は家庭をもち実家に暮らすことはなかった。父は認知症になった母親のことを心配しながら、ある朝倒れて亡くなった。父の死から一ヶ月ほどたつうちに、その松の木の勢いがみるみる衰えて、半年ほどですっかり枯れてしまった。それは父の後を追うように私には思われた。

すると不思議なことに庭に生えていた他の木がぐんぐんと大きくなってきた。これまで私の子供のころから大きさが変わらなかった榎の木が、松からは十五メートルも離れているのに目に見えて太く大きくなってしまったのだ。その他の庭木も心なしか大きくなってきたように思える。この現象には私も驚いた。松から何か他の木の成長を押しやるような成分が出ていたのだろうか。そんなことがあるのだろうか。これまで実家の庭はこの松の木が支配していたのだ。父が亡くなり、松の木が倒れた庭は、中心がなくなってしまう。そして私の実家にも大きな穴がぽっかりとあいた。

大峯奥駆道	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
マスコミが伝えないニュースの側面	伊藤明	2
哲学屋のつぶやき 22	祖蔵哲	5
おっちょこちょイぼけ 38	A O	7
素老人☆よもだ帳 26	坂本一光	8
孫ウオッチング 5	福田圭	10
父のシベリア抑留記 1	若山哲郎	11
戦争の思い出 2	T・C	14
大人の今昔物語 22	石川吾郎	16
B級サラリーマン渡世譚 34	明石幸次郎	17
五月待つなんとやら	大江雅兔	18
埋め草	C	19
編集後記	嘉	19
女 90年の軌跡	眞柃	20
俳句	土田裕	20

みんなで知ろう日本の危機 (11) マスコミが伝えないニュースの側面

伊藤 明

◆震災と政府対応にみる問題点と欺瞞

この一ヶ月のニュースでは、やはり熊本大分震災を第一にあげなければなりません。

四月十四日に熊本県を襲った震度7の大地震。そして二日足らずで再び起きた

震度7。

四九名の死者と多数のけが人。一人がまだ行方不明の状態。その後の震災関連死。さらに一万四千人以上の人が避難をしている状態といえます。

この地震は正直他人事とは思えません。関西にも何時このような直下型地震が起きて不思議はないように思えるからです。

関西人にはまだ阪神淡路大震災の体験（むろん東日本大震災も）をまだ生々しく記憶されている方が多いことと思います。私もこのニュースを聞いたとき、大震災の時の、神戸の街の写真を思い出していました。

しかしその後には伝えられるニュースにはもっと驚きました。本震と思われていたものが前震で、震度7が二度襲うという聞いたことのない状態。また震源が移って大分地方にも大きな被害がでたということ、さらにその余震の数が異様に多いこと、などなど。阪神淡路大震災や東日本大震災とはまた少し違った様相を呈しているような気がします。

一部に報道されているように、この地震は日本最大の断層群である中央構造線の上で起こったものようです。今回の地震に似た地震は、実は四百年ほど前の戦国時代・秀吉の時代から江戸初期にかけて起こった一群の大地震に似ているといえます。

一五九六年九月一日には規模はM7の

慶長伊予地震、三日後には、豊予海峡を挟んで対岸の大分で慶長豊後地震（M7から7・8）、さらに翌日にはこの地震に誘発されたと考えられる慶長伏見地震（M7）が京都で発生しているといえます。これらは中央構造線に沿った地域で発生しています。京都では、築城されて間もない伏見の城が崩れて、秀吉は大坂城へ逃げ帰ったという逸話も残っています。

このような大地震の連鎖がこれ以上起こらないことを祈るばかりですが、こればかりは分かりません。日本列島は地震と火山活動の活動期に入っているようです。

こんなときには、個人的な対策はもちろんだ切ですが、それは限界があることなので、政治が大きな役割を演じる必要が出てくるものです。

そこで今回は、この地震で浮かび上がってきた、安倍政府の動きやマスコミの様々な問題点をとりあげます。

◆屋内退避指示の罪

まず第一回目の震度7の地震の後、四月十五日安倍首相は、河野防災担当大臣から被害状況などの報告を受けて「現在、屋外で非難しているすべての人が十五日中に屋内の避難所に入れるように指示をしました（NHK）」と報道されています。安倍首相が建物の安全性の確認については何も述べず、十五日中ということを通

調していることがポイントで、しかもこれをNHKがそのままニュースで流していることです。そしてその夜、自宅に戻った人十二人が、本震とされる二回目の震度七の地震で死亡をしているのです。

これには安倍首相の誤った指示が大々的に報道されたということがかなり影響をあたえていると考えられます。現場の状態を知らない遠隔地（東京）の「指導者」が命令をすることでどうなるかを如実に表していると思われまます。この安倍首相の「指示」とそれを垂れ流すNHKは何と罪深いことでしょうか。この点はあとでまた、緊急事態条項との関連で取り上げます。

◆オスプレイ使用という震災利用

政府は、被災地域への支援物資の輸送に、何と米軍のオスプレイを使用しました。

オスプレイは長距離の連続航行ができることをその売りにしています。輸送能力ではこれより優れた大型ヘリコプターを自衛隊は所有しておりこれがすでにスタンバイをしているのに、わざわざ遠隔地から不必要なオスプレイを出動させたというのです。さらにオスプレイはヘリのスタイルへの移行には安全性の問題があり、しかも着陸はヘリのような機動性はなく、着陸地の地面がしっかりと整備されているところでないとならざるを得ないということなのです。

そして学校に着陸したオスプレイは段

ボール二百箱ほどの物資を運んだのみだったそうです。これは大型ヘリで十分に運べる量なのだそうです。しかもこの間自衛隊のヘリはいつでも出動できる体制にあったというのです。

要するに、安倍政権はこの大災害時に、今後日本各地に配備をまくろんでいるオスプレイの宣伝効果を狙ったショーをさせ、NHKなどがそのまま全国ニュースに流したということなのです。安倍政権にとつて、被災者の生命や困窮などより政治的パフォーマンスが大事であることの証明と考えられます。このような人の生死がかかっている非常事態の下で、第一に自分の政権の宣伝を考える政府を、現在の日本の国は持つてしまっているということをよく考える必要があります。また、報道がこのオスプレイのニュースを批判を加えずに淡々と流している、ということ、現在のメディアの状況を端的に表しているでしょう。

◆地震報道で鹿児島地方が無視をされた

今回の地震の特徴は、これまでの地震にみられなかったほどの余震の多さです。震度七の地震が二度も襲ったのは、記録にないとのこと。

この地震のテレビ報道で恐らくどなたも気がつかれたのではないのでしょうか。テレビ画面に表示される、震源の位置や震度の表わす九州の地図から、鹿児島地方がカットしてあるのです。

熊本隣の県である鹿児島県の北部も相当なゆれがあったことが想像されますが、NHKの画面が映し出す九州の地図には鹿児島県がありません。このことは、ネットでは大きな話題になっていました。実は鹿児島県の北部には、今年に稼働を始めたばかりの川内^{せんだい}、原発があるのです。

震度7の地震の直後には、NHKなどのテレビニュースでは、川内原発に異常はなかったという内容の報道はありませんでしたが、その後、余震の報道ではNHKと民放も含めて、この鹿児島県を抜きにした地図が映し出されてきました。そして原発についての言及は、NHKニュースでは聞かれなくなったのです。

そしてこの事実に対応して、NHKの榊井勝人会長が、熊本大地震の原発への影響について「政府の公式発表以外は報道するな」と指示していたことが明らかにされました。また同じ席上で榊井会長が「いろいろある専門家の見解を伝えても、いたずらに不安をかき立てる」とも発言していたことを、四月二十七日付の朝日新聞が報道しています。

「川内原発は地震の影響はない」と電力会社と政府のPRを垂れ流して人びとの命より政権を守るほうが重要だというのがこの人物の立場なのです。

「政府が右ということを我々が左ということではできない」と、就任当初から会長自ら報道の使命である権力のチェック

を放棄してしまっているような人物は公共放送のトップに居座っているのは、本当に深刻な問題だと思えます。

◆川内原発を停止すべき

原子力規制委員会・田中委員長は「川内原発は停止の必要がない」とくりかえし発言をしているが、そもそもこの人物は、政府が「世界一厳しい基準」だと言いつづけている「規制基準は、安全を保障するものでない」とかねてから主張しているのです。そんな人物が「川内原発は停止不要」と言ったところで、何の説得力もないし、論理的に考えればそんな重要なことを言う資格はないといえます。

このほどの熊本地震のゆれの加速度は1580ガルであったとされていますが、川内原発の耐震強度は補強しても620ガルにすぎないと言われています。またこのほど地震に襲われた大分に近い、愛媛県の伊方原発の想定は485ガル、だということです。しかもこの伊方原発は、日本最大の断層の集合体である中央構造線のもとと真上にあるのです。

原発の稼働の危険性を指摘した数少ないテレビ放送もありました。テレビ朝のモーニングショーでは、中央構造線上の伊方原発、見えない断層のある川内原発は震度七級の地震が起こる可能性があると言っています。

また川内原発の実態は安全性が確保されているとはとても言えないそうです。例

えば、

①「免震重要棟」が無い。福島原発にはこれがあつた。福島原発事故から学ぶどころか、安全化は大きく後退している。

②「フィルターベント」が無い。これが無いという事は、事故発生するとき原子炉内の大量の放射性物質が直接ばら撒かれてしまう。

③実効性のある「避難計画」が無い。そもそも避難計画が審査対象になっていない。米国の基準では即時再稼働禁止の状態にある。

④事故発生時、放射能を恐れずに命をかけて対策に従事する部隊組織が決まっていない(アメリカでは州兵が担当する)などなど。

非常に問題の多いものです。繰り返しますが、原子力規制委員会・田中委員長は政府が「世界一厳しい基準」だと言いつづけている「規制基準は、安全を保障するものでない」とかねてから主張しているのです。驚くことに、基準に合格したからといって決して安全を保障しているものではないと、規制委員長自身がぬけかけと言っているのです。こんままやかしはないと思えます。

◆ネット署名

「川内原発を止めてください。」という署名キャンペーンが、五月初旬で十二万筆を超えています。今回の熊本地方の地震直後に立ち上げられ、二三日のうちに

二万人を超えて、さらに増え続けているのです。これは、前回この欄で紹介した「保育園落ちた、日本死ぬ」の書き込みで盛り上がった待機児童問題の署名キャンペーン以上の賛同を得ています。

しかしこのような国民の不安の声を、政府と九州電力は完全に無視を続けています。

◆激甚災害に指定を渋った政府

菅官房長官が今回の震災を「大震災級に該当せず」と発言して批判の声が続出しました。

この発言に呼応するように、四月十四日に第一回目の震度七の地震が起こってから激甚災害に指定された四月二六日まで、十二日間もかかっています。

過去の例では、二〇一三年の山口県豪雨の時には四日後には指定されています。この違いは異様でさえあると言えます。

山口県が安倍首相の地元であることが関係することは容易に想像できますが、理由はそれだけではないでしょう。

激甚災害に指定されれば、国により災害復旧事業の補助金が格段に増強されて、被災地にとっては非常に心強いものになります。ましてや熊本県の蒲島郁夫知事が十五日の段階で早期指定を求めているのですが、二週間近く放置されていたのです。

また一連の熊本大地震のなか、安倍首相は初めて被災地を視察訪問したのは

四月二十三日。地震発生から九日も経過してからでした。安倍首相は、まず被害の大きい熊本県益城町や南阿蘇村をへりて上空から視察し、自衛隊や警察・消防などを回って「激励」したあと、ようやく被災地の避難所を訪問したのですが、そこで被災者に向けた言葉が完全に他人事のような「応援してますから」という言葉くらい。

政府は当初、自衛隊も二千人の派遣しか行なわず、十六日になってようやく増派を決定。さらに「官邸での地震対応に集中したい」などとして十六日の視察を取りやめた一方で、週明けには国会でのTPP審議を強引に進めようとしていま

す。これが全面黒塗りのノリ弁当のような交渉資料を出して野党の激しい批判を浴びて、結局TPP審議を一時棚上げにしたのは記憶に生々しいところです。

さらに、被災地への無償支援より、コンビニなどの小売店への配送を優先するという、信じられないようなことをしています。

被災地への視察を延期し、被災者に会うのはたった五分という首相も驚きですが、自分の配給がおにぎり一個だった事に腹を立て、更に「被災者に物資が行き渡らないのはあんたらの責任だ。政府に文句を言うな」と地元自治体に責任転嫁する松本文明内閣副大臣。こんなクズのような人物が内閣副大臣で現地入りし、

地震への対応にあたっていたのかと驚か

されます。

さらに大震災進行中に与党議員政治資金集めパーティーがいくつも行われ、不遜な発言もいくつも飛び出し、援助物資を運ぶ時期を遅らせてまでオスプレイを使ってくれと米軍にたのみ、パナモのモノレール建設に三千億円を支出して、連休には首相や閣僚は外遊に出て、惨憺たる外交を繰り広げるといったありさまです（なお国内の老人福祉や子育て支援などの財源がないなどと言いながら、安倍政権がこれまで世界にばらまいた金は八五兆円にも上ると報告されています。これは信じられないような額ですが桁の間違いではないようです）。

このように安倍政権は震災を自らの政権を有利にするチャンスとして利用しようとする態度がありありと見て取れるのです（そういえば補欠選挙で熊本震災をタイミングのいいだと言った政府側の議員さえいましたね）。

◆緊急事態条項の必要を叫ぶ勢力

震災を契機にして、緊急事態条項（この危険性については前号のこの記事をご覧ください）の必要を叫ぶ勢力が跋扈しています。熊本地震を受けて、非常時に政府の権限を強める緊急事態条項が、憲法に必要なと主張しています。

極右団体の「日本会議」がつくる「美しい日本の憲法をつくる国民の会」なる団体（正月に神社本庁とともに神社で

初詣をねらって憲法改正の署名活動をした団体）の代表という櫻井よしこという人物が、今回の熊本震災について「緊急事態条項ないから被害拡大」したのだといったデマ宣伝を、ここぞとばかりに流しています。緊急事態条項では、首相に権力を集中させますが、さきほど述べたように首相が現場から遠く離れた東京から現場に誤った指示を出して、被害を拡大する可能性はちよつと考えただけでも大いにありうるのです。さらに東日本大震災でも、緊急事態条項があれば消防車など公用車にガソリンなど燃料が供給できたとか、「緊急事態条項がないせいでガソリン不足で緊急搬送されずたくさんの命が奪われた」など嘘をでっち上げたり、とデマを流しています。現実にはガソリン不足で緊急搬送されずに亡くなった人は被災三県にはないことが明らかになっています。このように大きな災害の度に、緊急事態条項を理由に改憲を叫び、日本を戦前の暗黒社会に引きずり戻そうとする勢力が暗躍しているのです。

◆その他、震災の裏で行われたこと

震災などの大災害や、テロなどの混乱の時期に、どさくさまぎれに国民の目がそらされているうちに、とんでもない立法がされてしまうということがあります（これはショックドクトリンと呼ばれています）。見過ごせないことを箇条書きに挙げておきます。

・TPP審議を優先・熊本の災害対応よりもTPP審議優先しようとしたが、これは頓挫をしました。しかしまだ安倍政権はあきらめたわけではあません。

・憲法九条で答弁書決定・安倍政権は四月二十六日の閣議で、毒ガスを含む化学兵器や生物兵器の一切の使用を憲法九条が禁止するものではないとする答弁書を決定しました。かれらは日本の国を戦争へと、どんどん駆りたてているのです。

・『改正サイバー基本法が成立』・地震のどさくさの中、国会で成立しました。ネット監視法で、国家にとつて不都合な人物や団体に対してサーバーの管理人を通してネットの閲覧及び監視をすることができるといひどいものです。これは明らかに憲法違反です。

・豪への潜水艦売り込み作戦の失敗・豪への潜水艦輸出を安倍政権は画策をしてきたが、これは失敗に終わりました。武器輸出を解禁し、「武器輸出禁止三原則」を「防衛装備移転」(要するに「武器の輸出」ということの言い換え)と変えて、武器や原発を、自動車等に代わって輸出産業の中心にしようとしているのですが、これは日本を死の商人の国にするものです。武器輸出は、日本を「戦争のできる国」にするどころか「戦争なしではやっていけない国」にする危険なものです。

◆補欠選挙と野党共闘

四月二十四日に京都三区と北海道五区

の補欠選挙が行われました。これはこの七月に行われる参院選の行方を占う意味で重要なものでした。京都三区にはスキャンダルで辞任した自民党候補を立てられず、野党候補が圧勝をしましたが、真の意味での野党共闘が成立して自民候補と対決をした北海道五区がより注目を集めました。野党統一候補の池田氏はその人格的な魅力もあり大健闘をして、自民候補を追いつめました。結果は僅差で破れましたが、共産党と協力すると保守票が逃げるとの民進党内の懸念もあつたのですが、全くそんなことはないこと証明されたのでした。共産、民進両党の支持層の九割以上、無党派層の七割が池田さんに投票したことは、「票が逃げる」が杞憂だつたことを示しました。つまり、共産党・民進党・社民党・生活などの野党共闘をしつかり固めることで、七月の参院選、さらにはその次の総選挙への展望が開けてきたといえると思われまふ。ぜひとも、この安倍内閣という戦後最悪の政権を倒し、これ以上われわれの日本という国の破壊を止めさせる必要があります。

◆最後に報道に対する政府の介入を指弾している古賀茂明氏が指摘する「独裁と戦争へ向かうホップ、ステップ、ジャンプ」を紹介しておきたいと思ひます。

①ホップ・報道の自由への抑圧 ②ステップ・報道機関自身が体制迎合(大政翼

賛会)と国民の洗脳 ③ジャンプ・選挙による独裁政権の誕生

古賀氏によれば現在の日本はステップ②に入っているということです。そこからは戦争への道をまっしぐらに進んでしまふ、ということになるのです。③の段階になるともう止められなくなりまふ。それはナチスの歴史が示しています(これについては前号のこの記事をご覧ください)。独裁と戦争への道を止めるための、その非常に重要なターニングポイントになるのが七月の参院選挙です。この選挙で安倍政権へ「NO」を突きつけて、ぜひともこの「独裁と戦争への道」を絶ち切っていきましよう。

◆私たちは選挙で野党統一候補が立てば棄権をすることなく、どの党でも投票するという《戦略的投票》の意志表示で反安倍勢力の統一を後押しして、安倍政権を退陣させることを目指して、「野党統一候補ファンクラブ」というネット署名のキャンペーンを行っています。よければご賛同をお願いします。

URL <http://goo.gl/FD37Xo>



哲学屋のつぶやき (22)

日本国憲法と哲学的理想

祖蔵 哲

五月三日は誰もが知る「憲法記念日」でしたが昨今の世論の様子が大分と変化してきています。今年の各新聞の社説を見てみましょう。

朝日新聞『個人と国家と憲法と 歴史の後戻りはさせない』

毎日新聞『公布七〇年の節目に まっとうな憲法感覚を』

読売新聞『憲法記念日 改正へ立憲主義を体現しよう』

産経新聞『憲法施行六十九年 九条改正こそ平和の道だ 国民守れない欺瞞を排そう』

日本経済新聞『憲法と現実のずれ埋める「改正」を』

五全国紙の中で憲法改正に反対しているのは二社だけです。他の三社は明白に改正が必要と表明しています。改正のポイントには「九条」「緊急事態条項」「国会改革」ですが焦点は「九条」でしょう。

しかし奇妙なことに国民の反応はとなると、最近のNHKなど報道機関の世論調査にみられるように改正に賛成の比率は

減っているようです。

ある分析筋の意見によると、安保法制がすでに制度化されたため、この上憲法改正を改正する必要がなくなつたためという特異な見方もあります。しかし、実際に憲法九条が廃止されるという事態に直面すると国民全体に何か不安な気分の概念が漂ってきているということが大きな原因でしょう。

そこで再びこの憲法を概念的なレベルで語ってみたいと思います。このコラムにおいて憲法九条と哲学について、カントの「永遠平和のために」という一七九五年に書かれた哲学論文をもとになんどもその普遍性を解いてきました。改めて要約すると。

『現実世界では永遠平和状態を達成することはできない。しかし永遠平和状態という概念そのものは目指すべき目標として役に立つ。到達できないからといって最初からやらないのは、完全に道徳的になれないからといって道徳的な生き方を心がけないのと同じ。大事なのはそれを目指すこと。』

すなわち憲法九条は理想の目標であるということ。単独の平和が非現実とあってそれを放棄することは平和全体を否定することになります。軍備による緊張状態が平和であると錯覚していると、結果的にそれによって全体が減んでしま

うでしょう。九条改憲論者に多いのは北朝鮮や中国等を仮想敵国にし、それらが国が侵略してきたらどうするのか、何も抵抗せずに占領されるままになるのかというものです。しかし、この議論と憲法九条の戦争放棄は論点が異なります。

我々は、暴漢のような侵略国に対しては当然防衛はすべきであるし、むしろもっと時間と労力と知恵をかけてそれらに対してはそうなる前に対策をこうじるべきであると思います。この対策が軍事中心ではないということが重要な点であります。ここが、真の平和を理念とするのかどうかの分岐点です。武力による平和は緊張状態の継続のことをいうのであって真の平和ではありません。

さて、今回はさらに憲法を哲学的に考えてみましょう。最近出た岩波新書の柄谷行人「憲法の無意識」は哲学としてカントにも言及していますが、フロイトの心理学から憲法を解釈していたので興味深かった。まず、戦後の憲法が自主的なものか、外から強制されたかどうかで議論が分かれるのが通例ですが、この本ではむしろ外から与えられたものであるからこそという立場をとっている。憲法論議では常に出てくる問題であるが、概ね護憲派は自主的に制定した、改憲派は無理に押し付けられたものだからこそ自分で今作るのだとしています。柄谷は、現

行憲法は占領軍であるアメリカから強制的に押し付けられて、その結果、集団的脅迫観念が外側に向かわず心理学的に内側に向い潜在的無意識となつて定着したと分析している。フロイトは第一次世界大戦時にインシュタインとの往復書簡『人はなぜ戦争をするのか』でもこのような説を述べています。無意識になつたからこそそれが差し迫ると不安になるという理屈です。現在の世論調査の結果をうまく説明しているようですね。しかし、個人的な精神状態が集団にもあるのかどうかという疑問も一方には残ります。

私の考えとしてはやはり理念としての概念が国民に定着しているからと考えるたいのです。そこからこの憲法が自主であるかどうかの議論に戻る必要があります。日本が先の大戦で敗北したのは歴史的事実です。動機が防衛的であろうと侵略的であろうとそして必然的であろうと一旦は破滅したのです。それは確かに連合国という対外的な敵によるものかもしれませんが、事実上結果は自滅によるものでしょう。最終戦術として行われた特攻隊、自爆などに象徴されるように、自分で自分を滅ぼしたのです。自滅した主体に自主という言葉はあまりありません。自主というのは自分である主体があつて初めて使えるからです。そうするとやはり外から与えられたということになるで

しょう。

しかし論点は内外ではなくどこから来たかということにあるべきでしょう。ここに「人類共通の理念」からと置く方が自然と思われず。なぜなら、先ほども言つたように平和というものは人類共通の理念であるからです。自主というのは自ら制定と解釈してもそれがどこからもたらされたのがむしろ重要です。主体的に決定しようと、強制的に決定させられたとしても、結果として同じことが求められるならそれは単なる手続きだけのことです。なおこの本によれば、与えられたからこそ今まで大事にしてきている、もし自主的に作っていたらとつくに平気で変えているという逆説をもつて説明しています。成る程これは文化人類学で言う所の「贈与論」ですね。つまり人間は他から何かを贈られるとそれに対して負い目をもつ。それは普通、御返しになるのだが、一方通行になるとそれは脅迫観念に変わり心理的な負担になり継続するというものです。日常生活でも私たちが経験することですね。お歳暮やお中元には必ず返答します。つまり現行第九条は人類から与えられた、しかしその御返しはまだ出ていないという解釈です。

さらにこの本では憲法の精神歴史的な解釈も試みられています。すなわち憲法

の精神としての天皇制です。現行憲法を改正をしないの議論として全く取り上げられないのはこの天皇制です。ご存知のように憲法は全一〇三条ですが最初の一条から八条までが天皇に関する条文です。重要なことは何事でも最初に書かれるのが通例ですから、やはり日本国にあつては天皇制が国民主権より最も重要なことなのでしょう。ここに歴史的な背景があると柄谷氏は語ります。それは憲法の歴史的継続性です。現行憲法以前は大日本帝国憲法です。この憲法がそもそも

第一条で天皇主権を唱っています。そもそも日本国が近代憲法というものを初めてもつたのが明治維新によるものでそれ自体が平安時代以降断絶していた天皇制への回帰なのです。そういう意味では憲法の歴史的継続性は現行でも維持されているのですが、その継続が問われた時が正しく現憲法が生まれた敗戦時だったわけです。結果的に天皇制は維持された。それはある面、移り変わる権力の正統性を根拠づける役目としての天皇制の機能が生き残ったとも言えます。だから現在の天皇が現行憲法を守ることによってこたわるといふのです。いわば一条と九条はセットであるという考えです。これも妙に説得力がありますね。昭和天皇の意思を引き継いで戦後の追悼に関心を示す現行の皇室などの実例をみると、このよ

うに哲学的、心理学的、文化人類学的になど憲法を解釈してきましたが、若干樂觀的な見方に偏りそうな気もしております。権力の力はあらゆる現実や理想も破壊する力を持つているからです。私たちはいまだどういふ行動を起こさねばならぬのか立場を超えて知恵を出していかなければならないのでしょうか。暴力に対しては知恵で対抗する、再び自滅を防ぐためにも。

日本国憲法第九条…日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては永久にこれを放棄する。②前項の目的を達するため。陸海空軍そのほかの戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

連載「おつちよこちヨイばけ」(38)

昭和女、どっこい日記

シニアの結婚について

考えてみた…の巻

丁子から「聞いてもらいたい話がある」と電話がかかってきたのは、ゴールデンウィークの初日だった。「もうどうしたらいいのかわからなくて…」と半泣きの声でも、これは丁子のしゃべり方のクセみたいなもので、聞いてみたら、膝が痛い

(中高年はみんな痛い。私もときどき痛い)とか、帯状疱疹ができた(これはちよつと大変)とか、本人的には途方にくれる出来事でも、聞かされた方は「そこかあ。もう病院は行ったん？」と返すくらいしかなくて、体調不良を口にしながら、その同じ口にもりもり食べ物を取り込む丁子に「まあ、それだけ食べられたら元気やん」などとうっかり言ってしまう、にらまれたりするのがオチなのだ。で、今回もそうだと思う、あわてず騒がず、夕ご飯を食べる約束をして話を聞くことにした。丁子は「どうしたらいいのかわからない」という部分に到達するまで、ゆうに三〇分しゃべり続けた。そのうちに、私は「どうしたらいいのかわからない」から呼び出されたことを忘れて、「へえ、女の人がそんなに早死にするなんてねえ」とか「ふうん、娘さんが

一人あつたんや」と世間話のように相槌を打っていたら、「その彼から、結婚を前提に付き合っしてほしいと言われた」と突然、要点に。その彼とは、亡くなった女性のご主人。丁子にしてみたら、最初から要点を話していたのに、私は丁子が知り合いの女性の三回忌に行ったという最近の話題を何となくしゃべっているんだとばかり思っていたのだ。

「えっつ、いつ？」と驚いて聞く私に丁子はやっぱり「困りはてた」という顔で、「だから、三回忌が四月の初めで、それから一週間ほどして」。ゴールデンウィークの初日に聞いた話だから、まだホヤホヤではないか！

「よかつたんと違うの！ Tちゃん、結婚したいと言ってたやん」

「そりや、したいけど。顔が…」
丁子は私と一緒にいゆる十人並み。十人並みの女が老けたらどうなるか。少なくとも、お相手の顔のことを四の五の言える立場ではない、ということだ。

「何で、こんな不細工な人が私に…と思うわ」と丁子は嘆いた。だから丁子、他人の顔のことを言うたらアカンてば。

まあしかし、屈折したノロケということもある。よく聞けば、もう二回ほどデートもしているらしい。

彼は元公務員。定年後に奥さんを亡くし、一人娘の暮らす家の近所にマンショ



ンを買って、今はそこで一人暮らしをしている。今はその一人暮らしをしてるそうだ。結婚になんの支障もない。

なのに、T子の方は不満たらたら。

「二人で遊びに行くのに、おかしな普段着みたいな服装、信じられへん…」だの、彼が自宅を売って買ったというマンションについても「なんと浅はかな…」となぜか文句ばかり言い続けた。

「日も当たらんようなマンション。しかも古いし、駅から遠いし。だれも買えへんわ、あんな物件」。思わず、「行って、見たん？」と聞いたら、T子は女子高生のようにプルプル首を振って、「車で送ってくれたときに、外から見ただけ。部屋には上がってない」と否定する。別にいいんだから。もう二人とも立派なシニア。家上がるが、お風呂に入れてもらおうが、好きにしたらいい。双方、独身。双方がよければ、いまさら「品行方正な淑女」を目指さなくていい。

だが、T子は品行方正が好きで、
「食事をご馳走になったから、夜、お礼のメールをしたら『僕はキミに僕の隣で寝てほしい』って返事が来た。ぞーっとした」と言う。

何でぞーっとするかな。「そつちの方で飢えてるみたいで」そ、そうか…。そんなものなのか。

T子は実は、膝痛で通っている整形外科の先生が好きで、「ああ、あの先生が独

身だったらよかったのに。うまいこといけへんわ」としんから惜しそうに言った。

それなら断ればいい、と他人は思うかもしれないが、私は断りきれないT子の事情もよく理解できる。お相手の彼は五歳年上だそうだが、まだ二十年や三十年は一緒に暮らせる。

失礼かもしれないが、経済的な安定も魅力だ。年金生活者のどかが経済的安定だ、と思う人はたぶん、お金持ちか若い人だ。いま、一人分の年金額は非常に少ない。でも、元公務員の年金で生活がとにもできたら、T子の年金は「自分のおこづかい」になる。超安定である。

T子もちろんわかっている。「もうこんな話、二度とないかもしれない」と。

でも、「ぞーっとした」と言いながら、寒いときに思わずするように自分の腕をさするT子の姿に、一抹の不安も感じる。寂しいから、経済が安定するから、という理由で「好きでもない異性」と老後を過ごせるのか。余計に不幸になってしまふのではないか。

だからといって、「生理的にイヤな相手とは暮らせないと思うよ」という本心も言えない。だって、もし、いまのお相手より良い人が現れなかったら、T子は断ったことを一生、後悔すると思うからだ。

「よく付き合ってから決めた方がいいかも」という、おおよそ役に立たないこと

を言ってT子と別れた。

そして、昨日、ゴールデンウィークのなか日。今度は親友のF子が「Hさんから一緒に暮らしてほしいって、また言われてん」と言うではないか。Hさんは、

F子の血のつながらない親戚の人で、F子より二十歳ぐらい年上の染色家。Hさんの奥さんがF子の親戚で、何年前に亡くなっている。亡くなってすぐに、「一緒に暮らして」と言われて、「まさか!」と断ったという話は聞いていた。常識がないにも程がある、とF子が怒っていたから、私も覚えている。今度はF子のお母さんが亡くなって「あの話、もう一度考えて」と言われたらしい。F子には迷いが無い。「私に面倒をみるということや。遺産が一億円あってもイヤや」。男も女も愛し合った年月があるから、お世話ができるのだ。しかし、シニアの結婚話はどうしてこう夢がないんだろう。介護とお金と寂しさのせめぎあい。ああ…。

(AO)



素老人☆よもだ帳 (26)

坂本一光

◆再稼働帰れざる町なきように、不気味さを連れて地震が連鎖する

四月十四日夜から始まった熊本地震は大分にも広がり、九州中部を横断する幾つかの断層帯のあちこちを震源とする地震が頻発している。地震の連鎖である。熊本地震では、震度七が二回（十四日二十時二十六分と十六日一時二十五分）、震度一以上の地震は九百回を越えた（四月二十六日朝の時点）。十四、十五日の両日には大分でも携帯電話の緊急地震情報エリアメールが八回鳴った。大分市内の我が家は写真立てが落ちてガラスが割れたくらいのことだが、隣の別府市では屋根瓦がだいぶ落ち家の中はぐちゃぐちゃとか、食器がたくさん割れたとかの話が伝わって来た。由布市湯布院の方の被害はもつと大きい。熊本の被害甚大はくり返される報道のとおりである。幾つもの町や村の家々の崩壊、山の地滑り、鉄道や高速道などの寸断、崩れた家屋による圧死、震災関連死、一時は十万人を越えた避難などがあった。

今回の地震で不気味なことが二つある。この不気味さは、専門家ではないので専門知識には基つかない。一市民が直感的に感じる不気味さである。一つは、この間に起きた地震の震源が、九州を横断する複数の断層帯の南西方向および東の大分方向に広がっていることである。南西

方向の少し南には、現在唯一稼働中の川内原発がある。北方には停止中であるが玄海原発がある。また九州の断層帯の東の方向は、四国北部を横切る日本最大の断層帯中央構造線につながる。大分とは目と鼻の先、愛媛県佐田岬半島の付け根には、停止中であるが再稼働を待つ伊方原発がある。今回のような地震の震源の広がりや過去に例がなく、専門家は今後の予測は困難なこと、揺れの大きい地震にも警戒を、と言う。それは普通に考えれば、これら原発が大きな影響を受けるような大地震は起きない保証はないということである。私を感じる（私に限らないことは、『川内原発を止めてください』というネット署名が呼びかけ後数日で十万人を越えたことにも明らかであるが）不気味さの第一はこれである。

停止中の原発には核燃料がある。川内原発には火が付いている。国も電力会社も原発に異常は特に起きていないというだけで、それ以上の対策は特に講じていない。講じるつもりもない。原子力規制委員会の委員長にいたっても、委員会で検討したがすべて想定内のことで問題はないというだけである。想定内です、ご安心を、と言われれば言われるほど不安は増す。何か起きると想定外ですと言いつつ無責任さが見え見えである。こと原発に関しては何かことが起きてしまったらもう遅いのだ。それはフクシマが物語るとおりである。私を感じる不気味さの第二は、この無責任体制である。

最初の地震があったとき、あのNHK

でさえ（どのNHKや、これはちよつと八つ当たり気味、視聴者に向けて避難するときは火を消して、電気のブレーカーは落として避難するようにとくり返し注意喚起したものである。数多ある放送局、一般マスメディアよ、あなた方のどこか一つでも、エネルギー政策の考え方にどんな違いがあるにせよ、国も電力会社も先ずは原発の火を消して今後に万全を期せと、せめてこんな時くらい社をあげ大きな声でなぜ言わないのだろう。それは偏向報道ではないだろう。原発の火が激しく燃え炉心が融け落ち、放射性物質がフクシマのように外に漏れ出したとき（より大きな安心のため、万一のときは原子炉内の圧力を下げるが、その際に放射性物質は一定量必ず外に放出される。原発には万一があつてはならないが、万一の絶対的回避は不可能というもの）、今回の地震で実際そうであつたように交通手段が寸断されていて本当に安全に速やかに避難できるのか。住民の命にかかわる避難計画はそもそも原発の新規制基準の項目ですらない。せめて、せめて火は消したらどうだ。結局のところ、フクシマは他山の石どころかすぐ目の前のわが家の庭石であつたが、そこから何の教訓も汲み出していない。公も私もこれほど無責任でよいのか。日本という国は、専門家も政治家も企業も世界で一番好き勝手なものを使い振る舞うことができ、そしてここに至っても責任らしい責任は決して取らなくてよい国であるらしい。

だから、誰の川柳であつたか、『過ちは繰

り返します何度でも』となるのだ。他山の石？知ったことが多すぎる。チェルノブイリ事故（一九八六年四月二十六日）から三十年が経ち、フクシマ事故から五年が過ぎても、それを許さぬ国民的な力はまだまだ発展途上だ。安らかに眠りにつくこともできぬ不気味さを前にして、よもだよのう、素老人は怒りの川柳を詠むしかない。しかし、はるか以前に本稿で紹介したように、『年寄りをバカにするとうなるか知っていますか。後悔するか早死にするんですよ』というわが師の言葉もある。よもだ素老人の片言隻語にも真実の一片が含まれているかもしれない。ご用心を。

- 馬耳東風ヨウ素セシウム飛ばす風
- 馬耳東風ブルトニウムも飛ばす風
- メルトダウンも一度あれば国滅ぶ
- メルトダウン

わが亡きあとに来たれとして
○恐きもの地震原発アロいくさ

（火山噴火もありますよ）

本稿が活字となる頃には、願わくば地震の収まり、被災地の人々の暮らしの少しでも平穏ならんことを祈ります。

◆記憶の呼び戻しも連鎖する

ところで、今回の地震は断層の境が水平にずれる「横ずれ断層型」だという。今回断層を横方向にずらした力の原因は何か。幾つかのプレートとの動きによって九州にかかっている異なる方向の大きな力の働き方の総結果であるらしい。報道

によれば、熊本県益城町付近の農地に現れた断層の水平方向のずれは約二メートルにも達した。それを聞いて、中学校の理科の先生から地震には断層を反対方向に引つ張る力で起きる「正断層型」と、断層を圧縮する力が引き起こす「逆断層型」があると習ったことを思い出した。これらの地震では断層は上下にずれる。そして奇しくも、私が生まれた家の近くの谷を流れる小さな砥部川には、遙か昔に中央構造線上で起きた逆断層型地震の断層面の露頭が川を横切るように残っているのが見える場所があり、国の特別天然記念物に指定されていた。その辺りの地名はやがて断層口と呼ばれるようになるが、当時の地元では『衝上（正しい読みは「ししょうじょう」）かもしれないが我々には「つきあげ」であつた「断層」と言っていた。そういうことを知って、私は、

自分が生まれ育つたこの狭い小さな土地が、もつと広く大きい、中央構造線が貫く日本列島の中に位置づけられていることに不思議な感慨を覚えた。

理科の先生に教えてもらつて今もはっきり覚えていることがもう一つある。初夏のころだった。運動場での全校朝礼が終わろうとする頃、理科の先生が大急ぎで朝礼台に駆け上がり、「皆さん、回れ右！」と言つた。「松山の方の空を見てください」中学校は丘の上にあつた。松山市は北の方向である。見ると曇り空の向こうから黒ずんだもこもこした雲が横一戦になつて見る見るうちにこちらに向かつて進んで来ていた。「二年生の諸君はつ

いこの前に天気のことを学習しましたね。あれが寒冷前線です」と言う。「急いで教室に戻ってください。雨が降ります。寒冷前線だから寒くなります」バタバタと朝礼が終わりクラスに戻ると、ほんまにザーツと雨が来た。急に風が強くなり窓に掛った白いカーテンが大きく揺れ、初夏にしては寒さを覚えるほどであった。どう表現していいかわからなかったが、たぶん私は感動していた(何ちゆう先生や！)。

ここまで書いてきて記憶がまた戻ってきたことがある。この先生は理科のいわゆる第一分野(いうところの物理・化学領域)と第二分野(生物・地学・天文学と地球科学領域)の中の地学領域を教えてくれた先生である。今の中学校では絶対扱わない実験を次々に見せてくれた。あの時は金属ナトリウムの小さな瓶を準備室から取り出してきて、「危ないから石油の中に入れてい」と言う。ピンセットで小片を取り出し、「金属だけじゃわらかい」と言って、実際にナイフで切った。試験官に水を入れその中にごく小さいかけらを入れた。金属ナトリウムは水面上で泡を出した。先生は試験管の口を親指で抑え、しばらくしてマッチの火を近づけた。ポンと音がして炎が点いた。「金属ナトリウムは水に触れると反応して水素を発生します」

その頃は、化学反応を学ぶとき原子や元素記号も学習した。元素記号について教えてもらったこと―これは傑作だった。

「鉄に亜鉛メッキをしたものをトタンと言います。トタンの屋根や樋、トタンの

バケツ。ぜんぜん錆びません。だから亜鉛の記号はZnです」ピカピカに磨いた鉄板を見せ、「銀やと思えやろ。実は鉄です。へー、これが鉄か、フェー。鉄の記号はFeです」また同じように輝く金属片を見せ、

「これは銀です。先生はあげなことを言うところけど、さつきと同じ鉄やと思てるやろ。あげなこと言うて：銀の記号はAg

です」まだある。極めつけは、「金は金属の英雄。金の記号はAuです」こじつけダジャレではあるが、半世紀以上たつてもまだ記憶に刻まれている。それから二十数年後、山陰の大学の教育学部に勤め始めた頃、隣の生物学研究室の学生たちが、先生と一緒に実験室の廃液を集め処理施設に持っていく準備をしていた。ふと見ると、金属イオンを含む廃液はポリタンクに元素記号を書いて区別してある。そこで私は先述の元素記号の話を披露した。しばらく学生たちは面白がってくれたが、先生はふと一人の学生に「あとで必要だから薬品棚からヨウ素の瓶を持ってきて、どれくらい残っているか見ておくから」と言った。「ほとんど残っていませんよ、

空の瓶を持って学生が戻って来た。それを見た先生は、間髪入れず言ったものである。「おお、あいつはどこへ行ったのだ!」、と。あいつ、ヨウ素の元素記号はIで、分子記号(分子式)はI₂(アイ・ツウ)である。こういう先生はどこにも

いるのだと感心した。

ふり返ると、中学校の理科の先生は、赤リンの燃焼を利用して空气中に酸素がおよそ二〇パーセント存在することを示す実験、水銀を使ったトリチエリーの実験(大気圧は一平方センチメートル当たり約一キログラム重の力「空気の重さ」)が働く圧力である)なども見せてくれた。

今にして思えば、田舎の学校にさまざまなら実験を先生が実に手際よく演示実験してくれたこと、今なら危険でやらない実験を注意深く生徒にもやらせてくれたことなどに感心する。私にとつてこの理科の先生は、自然に対する、というよりは未知の世界に対する、自分が知らないことに対する興味をかきたててくれた先生であった。

理科の先生が私の中にかきたててくれた興味は自然そのものに対してというよりもまだ見知らぬ世界の知識に対してであったというところには、その後私が自然科学(化学)を専攻しながら必ずしもそれにのめり込むことができなかったという、ある種中途半端さが表れているのかもしれない。私はわかったような振りをして、「自然を知らなければ 人間のことはわからない 人間を知らなければ 自然を知る意味がない」などと、今でもよもだ話を好んでしている。

(かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人)

孫ウオツチング 5

福田 圭

二〇一六年四月一〇日(日)お祭りの日だったので、九〇歳になるひおばあちゃんをはじめ親戚六人で鳥取の光君に会いに行く。曾祖母、祖母、父母の世代と四世代の出会いである。

四月からお母さんが働きたしたので、保育園に通いだす。生後六カ月では、母恋しくて泣きだしたりせずにスムーズに保育園に通いだせたそう。一〇時から十六時半まで家の外で過ごす生活の始まりだ。そのせいか、親戚六人と対面しても泣かずに機嫌良くしていた。握手しようとして手を握ると、次々に手を握り返してきて、可愛い!話ではできないがコミュニケーションの始まりだ。ケータイを渡すとねぶり始めた。何でも口に入れるから気をつけなさいといけない時期だ。首が完全に座って膝の上にちよこんと座り抱きやすくなっている。次々に抱かれても愛想よくしている。おかゆとスープなどの離乳食も一日に一回食べ始めたこと。四月二十五日(月)一月前に下側の歯が一本生えてきたが、歯が二本に増えている。短時間なら一人でお座りができるようになった。長くは座れないので、少し経つと手で支えてやる必要がある。「あー、あー」とか、かなり長く、喃語を发声する。おじいちゃんが哺乳瓶でミルクを飲ませてやると、ごくごくぐくとかなりの速さで瓶を空にしてしまった。たくましく生きる力がついてきたようだ。肌の荒れは、ましな状態が維持できている。次は大阪の父方の父母のところへ光君が遠出してくることになる。

「流転八十年」(1)

若山哲郎

世界一周旅行記を書き終わって、さて次は何を書こうか、今年はドイツへ長期旅行するので勉強のためドイツの歴史でも書こうかなと考えている矢先、ある読者から君のお父さんのシベリア抑留記を載せたらどうかと薦められた。思ってもしなかった。そうか、もう自分自身も還暦を越えてだんだんと人生を回顧をすべき年齢になってきている。しかし、誰でもそうであるが、自分や自分の家族、両親とはなかなか正面から向き合うのが難しい。特に、自分の親のことに關しては一番知っているようであるが、実は知らないことの方が多いものだ。

私の両親はすでに亡くなっている。戦争世代だ。しかし、存命中にはなかなかその当時の体験をまとまって聞く機会がなかった。が幸いなことに父親は自分の体験記を二冊、自費出版という形で本に残していた。親しい人に読んでもらったりして当時は評判になり、地元KBSS京都テレビにも出演したぐらいです。その本を読んでもらっていた一人が今回推薦してくれた友人です。

出版は二十三年前、一九九二年七月、本文中に出てくるPKO協力が可決された年でもあります。父は平成八年一九九六年に八十三歳で亡くなりました。この本が父の歴史の遺書となったわけです。タイトルは「流転八十年」まさしく時代に翻弄された歴史の記録です。

流転八十年

この道はいつか来た道

戦争に負けて憲法を持ち、武器を放棄すると世界に宣言した我が国が、一九九二年六月に大変なことを国会に持ち出した。武器を持って海外に出ていくというPKO法案の強行なのである。平和を守るという旗じるしの下に、国連を通じるというのだ。いつか来た道だ、東洋平和のためと私たちを狩り集めた十五年戦争と同じだ。PKOはやがてPKFに、更に外敵にと拡大するのは火を見るより明らかだ。あの日の道なのだ。あの世界宣言は空念仏だったのか。喩え俘虜になろうとも、武器は持たぬと誓ったことは？

協力者と私

特に私の記録を読み絶えず激を贈って頂いた台湾政府、葉先生を忘れることは出来ない。又、私の背後には常に妻がいる。妻は七十歳を越えてから日本画や水彩画に親しみ、独特の童心を盛り上げユニークな作品を長い三十年の高等学校勤務を終えてその余生を捧げている。これに私は励まされ教えられたことは多大なものがあった。直接又は間接にこれら多くの方々に協力を頂いたものの上に来上ったとより他に考えられない。私の人生回想録をどうやら活字にまで持上げられたのは、これら縁の方々のおかげだ。重ねて深い感謝を捧げ尽くしぬ気持ちを表したい。

はじめに

私たち夫婦は共に大正二年(一九一三年)生まれで、この時代は俗に大正ロマンと呼ばれ、平和主義の強い時代で、それが昭和初期満州事変頃より軍国主義の時代に移り、そして昭和二十年(一九四五年)敗戦まで日本民族を戦争に追い込んでしまいました。戦争は義務を強調して、権利を抹殺してしまふものです。人の生きる権利を奪ってしまふ権利が、法律でいやおうなく固められます。特に戦時は人の命を奪う権利、人を犯す権利、人の財産を奪う権利が国に与えられてしまふのです(敵国も日本国民に対してでもです)。こんな世の中にしてしまつたらもうどうしようもないのです。

しかしよく考えてみないといけません。こんな国に誰がしてしまうのでしょうか。私も誰もよく考えてみましょう。戦争犯罪者でしょうか、日本国象徴の天皇でしょうか、政治家たちが大財閥であったのでしょうか。戦争反省は静かに民族の心底から考え直さねばならないようです。ドイツ民族の戦争反省とは異質的なものようです。日本民族のそれはそれは恥しいものであると言えましよう。

私は敗戦後シベリアに俘虜となり、イルクーツクで日独俘虜収容所に合宿することになり、生死を共に過した時の教訓でそれを知ることが出来ました。俘虜

記の中で述べたいと思います。

我々人間はどのような苛酷な環境に置かれようと沈着でありたく、又どんな熱狂と嵐の中や悲嘆の極に陥ちようと自我は失いたくないと思います。何よりも大切に仲間の友の命も自分と同じ範疇に容れたいものです。自分だけが助ければよいでは、俘虜の黒パンも自分達から逃げてしまふし、又その場逃れの処置がやがて自分の命までも抹殺する自殺行為にもなり、馬コーリヤンは人間の生命をさえ守ってはくれなかったのです。私の俘虜記をお読み下さい。

聡明になって自己を守り、他を犯さず、己れも他も共に手を取って生きることが戦争のような特種な環境であろうとどんな環境でも同じことと思うのです。

これからはどんな時代が変わろうと時代の大勢に熱狂して文字通り狂わないように、狂った渦の中に陥ち込めば戦前の日本民族のように政治家も軍人も天皇もジャーナリストまでも何も彼もが戦争にだっつ走ってしまうのです。誰に責任があるかでなく民族の一人一人にその責任があったと考えるのです。若い青春の頃を省みて痛感します。

若山 勲 七十七歳時

私の人生回想

「平凡であるべき人生が」
人生を如何に生きたらよいか私たちが

の生きる課題であるうが、なかなかそう思うようにはいかないものです。特に私たち夫婦にも世の波風は遠慮もなく押し寄せました。私は中国北方からベトナム方面へ、最終はロシア共和国の俘虜です。私の妻は赤十字社看護婦として召集を受け、北支・ビルマ・仏印・タイと数年間の青春を嵐の中に巻きこまれ続けました。戦争がもし無かったら私たちの時代の人間はもつと幸せな人生を生きられたでしょう。私たちと同様同時代の人々は悉くが青春をも人生をも消し飛ばされてしまったのです。先づ私の人生回想の概略を述べたいと思います。

封建家庭に生まれ育つ

私がこの世に生を受けたのは一九一三年で第一次世界大戦の頃で日本は連合軍の一員として出兵しドイツ軍に戦勝したのですが、不況続きで一部は大成金はあっても一般庶民は現代ではとても考えられない程の貧困のどん底の時代でもあったのです。

私の祖父は広島旧浅野藩の士族、母方の祖父は京都熊野神社の宮司であったそうです。母の長姉は竹田の宮家の第二婦人として宮家に仕えていたといえます。母の兄も伊知地男爵家の執事を勤めるという封建家庭の家柄だったようです。今は落ちぶれているが・・・という声がいづつも私の幼い頃に聞きなれた

言葉でもありました。私の母が京都から広島に移住したのが明治後期、母の兄の広島転勤で広島の父と結ばれるようになったのです。

父の生い立ち

父は広島県立第一中学校を優秀な成績だったようですが卒業間際、鉄棒練習中の事故で脳障害を受け、親友は陸軍士官学校に入学したがその友とも訣別し不幸な生涯をここから送ることとなったのです。

父は独立する能力のない体になったが、父の兄の後見で、父と母とが結婚されました。若山家も浅野藩勘定奉行職としての武具一式は本家の土蔵に残され、幼い頃の私の目にも残つてもいるし父も家柄の自慢の種はいつも聞かされた記憶があります。

私の兄弟は六名だが戦争で二名を失い、現在(一九九〇年)は四名生存している。

不遇な父母の結婚

父が普通の体でないのに母と結婚するというのが出発から既に不幸をほらんでいました。

父はその兄に支えられて幾度か商売も勤めも転々、暗い家庭となっていくのであった。私を長男として幼い兄弟が先祖の残した家屋数軒からの家賃の収入が生活費の一切である。月収は約三十五円で。最低五十円は人費としてぎりぎりであ

あったのですが十五円不足のまま日を送るのです。父は働こうとする意欲はあっても、脳障害では思うように動けないのです。母は子だくさんのためどうすることも出来ない環境。月末になると収入の不足は家庭内の争いとなるのです。当時八百屋、米屋は「つけ払い」と言つて月末払い、この不足は年末に総決算の大払いが待っているのです。

その都度母は親元に借金通いが数年に亘る年中行事のようになり、苦しい生活の連続でしたが、しかしまだ財産のあるのはまだ上等の方だったかも知れません。

貧国日本

日本国の庶民の大部分が貧乏でもありませんでしたが、世界が貧困に襲われた時代でもあったようです。農村でも貧故に娘を女郎に売る家庭も東北地方に出て来ました。現代のフィリッピン、インド、アメリカのスラム街と同様の時代です。

私の少年時代

私のまだ六歳くらいの時、貧民が食えないために米屋を襲うという時代「米騒動」という事件が全国的に起こり、私も道路に出て馬上の憲兵が暴民をおっ払うということも脳裡に残っています。こんな食えない私たち兄弟が成長して、私も中学校へ入学するような年頃を迎

えたけれど、わが家の状態では中学校、高校、大学というところを望んでも許されるものでもなく昭和三年小学校を卒業し、学資も不要の国立学校専門部(現広島大学)に入学しました。

国費ですし師範系統の学校なので忠孝を思想とした皇国教育、国民教育の指導者養成を目標とした五年制の専門学校で入学後二カ年は寄宿舎の合宿教育で、堅実な農村出身の子弟と都市出身の士族の子弟を受け入れ受験書類にも家系等も記載し提出させたようです。昼も夜も上級生は下級生をしめ上げる軍隊教育そのままの学校でした。

入学試験は県下の五百名の受験者中八〇名の募集の競争率でしたがよい順位で合格出来たようでした。それは私が入学して第一学期は組長に任命されたことです。三学年に進級した時、私は広島市内に家庭があつたため通学が許可されたことでややこしい家庭に再び住まうことになり、学期試験、学年末試験も更に卒業試験もそつちのけで一度、たつて机に就いた記憶もないくらいでした。貧困という嵐に襲われたのです。落第は覚悟していましたが八〇名中下位でやつと卒業しましたが、すぐ徴兵検査にかかり広島歩兵第十一連隊に入営しました。私の卒業した専門学校は学校教練においても模範校だったため、歩兵連隊を終えると文句なく士官適任証が与

えられ、すぐ予備役歩兵少尉に任官して、二学期半ばに広島県の倉橋明德青年学校教諭として青年男女の指導者として採用されました。在任中約四カ年、釣士田つよしだの古中きな伯母に親身のお世話を頂いた思い出は忘れません。

しかし私は京都に行き同志社大学経済学部立志望止み難く、広島在の学校勤務四年で大学専門部に転学し、昼間は京都市御室小学校に、夜は大学専門部へ通うことになったのです。それが今にして思えば幸か不幸か、時は戦時ですし、遅かれ早かれ男子は国民皆兵の下に陸海空の軍人です。不具者でない、少しくらいの男なら全兵役です。他の若い人々より一歩前に兵隊になるという運命がいやおうなく待っていたということになりました。

師範系統の学校出身者は五カ年の教員生活が義務年限として課せられていましたが、私は四年で大学に転じたとの罰則で直ちに赤紙の徴兵令状が京都の私宛届けられたのです。

歩兵少尉が野砲隊再入隊

「広島連隊区司令部に出頭し徴兵検査を受けるべし」当時京都御室小学校で私は小学校三年生を担任してまだ数カ月です。子どもたちとも尽きぬ別れ、職員の人々とも永別。万歳の声に送られて京都を発つたのです。

その日の壮行会場で受持児童の代表であった学級長が原稿用紙に次の短詩を私に手渡ししてくれたのです。

私の先生野砲兵千里の広野を砲引いて御国のために走ります
涙はのどを流れるけれどばんざい

さけんで送るのだ (詩の一部)

この詩は現在京都市花園妙心寺雑華院住職渋谷厚保氏の作です。

桜吹雪の中を渋谷君、岡君、勝谷君、梅田君等もはつきり浮かびます。

このような理由で出征後、私の月給は戦地から帰国まで母に送られることになり、心に残る何もなくなったことは当時の私としては解放されたわけです。

時に昭和十三年二十四歳でした。

さて連隊区司令部で検査の順番待ちをしている私の肩を叩く司令官の大佐

「よし君は甲種合格、立派な体格だ。と

ころでこちらの調査するところによれば、お前の軍歴は陸軍歩兵少尉に任官しとるが砲兵少尉として任務が全う出来るか」とつさに私は「自分は野砲兵隊に入隊する限り初年兵からやる覚悟であります」と答える。するとその大佐殿いきなり会場の徴兵受驗者全員に対して

「全員集合せよ。わしの伝達することがある」と大声を上げ「皆の者この男は陸軍歩兵少尉である。しかし野砲兵として一兵からやり直すと言うとる。軍の模範である」と私を壇上に立たせた。新聞記

者のフラッシュの的となった。

よく考えると歩兵の戦術は少尉として出来たとしても砲兵は兵種が異なる。砲手班、馭者班、観測班、通信班として分けられ大砲を撃つのが任務である。できる筈もない。そう答えるを得ない。

この談話は他日私が野砲隊に入隊し見習士官に任官する時、新聞記事ともなり、京都の小学校三年作詩「私の先生野砲兵」併せて浪華節ともなったことを耳にしたのです。

このようにして歩兵から野砲兵に転科した初年兵の私は一期の検閲には連隊首位の成績で上等兵候補の印が押され、兵隊の基礎ともなる各個教練、砲兵典範、操典内務書、軍人勅諭全般に亘りほとんど満点に近い成績であった。これは歩兵時代既に総べても履修し、小隊

中隊教練も終了した陸軍歩兵少尉であれば当然のこと、一期の検閲が終わると次には幹部候補生試験、広島、山口、島根、鳥取の広島連隊区の大学、高校、専門学校卒業者合計二千名、受驗結果は首位である。この軍隊序列というのは不始末のない限り半永久的効力を持つことが軍隊の通例であった。

出征

「戦線」へ

この時から足掛九年、私の青春は戦場生活に明け暮れた。戦場からロシヤから

年数十通の軍事郵便を広島・京都に郵送した筈だが、広島は原子爆弾、京都も届くことなく、私が細かく残した全記録はロシヤ軍部に没収され皆無となった。短詩・短歌・俘虜記「氷原に綴る」は帰還直後より思い出の新しい中に整理し再生したもので、日時、場所は忘却し割愛してしまった。残念なことであった。

支那派遣軍総司令部に所属していた時は暇をみて、短詩・短歌の記憶がしっかりしていて忘れることもなかった。

戦場というものはいつも戦争を繰り返しているのではなく、敵と相対して待機の日がどのくらい長いものかもわからない。

その均衡の破れたときが戦争行動に移る時なのだ。

その土地の警備といっても休んではかっているのではなく、隙をねらっているのだから敵が突如侵入、味方陣地を破壊、兵隊が殺傷されるか判らない。そんなことも幾度かあった。

敵を前に戦場は中国大陸だから無限に広く油断大敵だ。作戦というのはどちらかが主動的に仕掛ける戦争の開始である。ことばでは説明できる生やさしい出来事でない。お互い命のとり合

いである。遭遇戦と言っても敵と申合せみたいたいばったり出逢うものでなく、それまでが飲まず喰わずの数日、雨の日も嵐の日も闇夜も、のんきな日は瞬

時だつてない。くたくたに疲れ切つて息絶え絶えの果、敵と闘うのが普通で、それまでに身体の弱い兵や運の悪い者は死んでしまう。肉体も精神も普通の状態ではない。おまけに戦場の大地は雨の日に泥の海、日照りは赤黒い草の果ない広野で、戦場の草いきれとか砂ぼこり、火ぼこりは臭いさえ尋常ではない。中国の大地は新しい土ではない。人骨や野獣の死体を十分に含んだ黒色の土、草が萌える頃は草いきれがたまらない。何か死臭やその魂が数千年もその中に眠っているみたいだ。

この戦場に立ち、敵陣の前に火ぼこりをいつも感じるのだ。いぶしたような、ゆすぶられるような臭いだ。

武者震いともいうが、昔の武士が初陣に示したあの勇気とかそんな勇ましいものではない。砲の大きいけれどにぶい音が遠くに轟き、それが又遠くこぼまると恐しさに身が震う。これではいけない、部下も仲間もいることだと思つてもその震えの止まることはない。小銃弾が飛んでくる。ヒューヒューと空をよぎる。ブルーブルーと低く近くをよぎる。高いとか身近いとは判るような気はするだけで夜や闇は恐ろしさに身がすくむ。直進する弾丸もだが高い空に孤を描いて飛ぶ迫撃砲の砲弾は私たちの前方二、三百メートルの大地や草をさき飛ば

し掘り起こして私達に迫る。次の砲弾は必ず、距離を延ばして私達を挟むのだ、三発目が必中の砲弾、震えと死のわれらへの直撃弾だ。幾度この遭遇戦の火ぼこりに出合ったことか、慣れるもので何でもない。

野砲、山砲、連隊砲が乱れ、弾丸が前に後ろに土を飛ばし草原を掘り起こし私達を襲う。死の前の硬直する恐怖感戦陣はこの生命の危機を自分の体が自分に訴えて来る。戦場の勇者こんな人はいないと思う。敵を前に敵陣に突入するとき、普通の感情ではない。特に弾丸の飛んで来る敵陣に突込む時、狂人になつて夢心地で刀を持ち銃剣を持つて突込む。反射作用というか、恐怖の極致を乗り越えるのは狂人の境地より他にない。戦争というものは敵に対し、同時に己れに対しての死闘なのだ。

第一回は父の出生から出征へと語呂合わせのような記録のはこびとなりましたが、次回からはいよいよ初めて実戦の戦場に立つという場面になります。



出征時の父と弟

戦争の思い出(2)

T・C

三、兄の思い出

戦死した私の兄のことを少し書いておこうと思う。

兄は奈良県月ヶ瀬村で生まれた。家族と共に大阪へ転出をして、学校を卒業後、陸軍造兵局に勤務する。温厚にて明朗な優しい心の持ち主だった。私より十二歳年上で、年が離れていたためか、末っ子の私をよく可愛がってくれた。友達にも厚く、誰にでも好かれる人だった。

兄は本当に優しくかった。自分の小遣いもあまりないのに、本好きの私のために、道端に出る夜店の古本屋で本を買ってくれたことを覚えている。講談社の「孝女白菊」だった。ずっと大切にしていたのだが、いつ失くしてしまったのだろう。

また、夏には近所の子供たちを集めて、花火をしたり、床几の上で怪談や面白い話をしてくれた。ありきたりの昔話だけでなく、兄が自分で創作した話もたくさんあった。今でもその筋書きや兄の語り口調まで、よく覚えている。私ばかりでなく、近所の子供たちも「兄ちゃん、また話をして」と兄にせがんだ。そんな兄を若くして亡くしてしまったことが、本当に残念でならない。

兄は二十一歳で出征して、三月二十一日に奈良の連隊に入り、中支、マライ、

ビルマと転属した。最後は、

「ビルマ、タヨンゼで豪雨に遭い、衣服は腐敗し、軍靴は破れ、食べる物もなく、草根、木皮を嚙り、飢えを凌げど、時には毒草により意識不明となり、口腔の痺れ、辛苦難も挑して戦えど、乾く間も無き衣服に皮膚は爛れ、身体は腫れ、遂に死す」

この事實は、同じ月ヶ瀬村の軍曹からの便りで知った。

昭和二十年、兄の遺骨を母と姉と、当時月ヶ瀬村で疎開していたので村長さんたちと八人で奈良まで迎えに行った。そのとき私は十三歳だった。

白い布に包まれた四角い小さな箱。それを見た瞬間、ここに兄が入っていると、は思えなかった。兄は人より身長が高く、「電柱」というあだ名が付いていたほどだ。こんな小さな箱に入るはずがない。私は涙の一つもこぼれなかった。帰宅してから遺骨を安置するときに、母がそつと箱を開けて、姉たちと一緒に中を覗いてみた。

何ひとつ入ってなかった。小さな紙切れに「〇〇 ビルマ、タヨンゼにて 八月三十日 戦病死」と、たったそれだけ書かれていた。母、姉たち、私、誰一人泣くものはなかった。

兄を亡くしてから七十年以上が過ぎ去った今も、私の心の中には兄を忘れることができない。あまり人に話したこともない。思い出すのが辛いだけだ。

私の孫は、戦死した兄に似ている。顔

も似ているし、性格もよく似ている。だから私は彼をことさらに可愛く思うし、その反面、見るのが辛い時もある。

兄の戦死した当時、世間にはそんなお気の毒な家庭がいっぱいあった。しかし、皆「お国のため」と言って、口に出して悲しむ人はなかった。

この戦争の犠牲者はそれだけではない。広島、長崎の原爆、東京、大阪での大空襲、死者は数え切れない。「戦争反対！」と叫ぶまでもなく、叫ばなくても反対に決まっている。

姉の生存中は、八月三十日の兄の命日に、京都七条の霊山観音へよくお参りをした。そこにはたくさんの方々が参りてお祈りされている。私たちが参拝すると「〇〇」と記した兄の戒名を出してきて下さる。私は心から拝んだものだった。姉の死後は一人で行く気にもならず、せめて月ヶ瀬の軍人墓でもと思うが、足が痛くてそれもままならない。

近日は毎夜、寝床につく前に「般若心経」を唱えてから休むことにしている。自分よりも先に亡くなった人たちのために。父母、姉たち、そして夫も、病気で亡くなったのだから仕方ない。でも兄は二十三歳の若さで、国の犠牲者となってしまったのだ。私の憤りは止むことはない。

四、母と扇子

私の母は立派な、強い人だったと思う。母は二十歳で長姉を産み、四十歳で末

っ子の私を産んだ。四十四歳にして夫を亡くし、子供は五人。どうして生活できたのかと不思議に思う。今のように福祉が充実していたわけでもないのに、母の泣き言は聞いたことがない。

私も母のような人になりたいと常々思っていたのだが、とうてい足許にも及ばない。

もしここで戦争でも起きたら、私は生きていく気力も失ってしまうだろうし、孫二人の兵隊さん姿など決して見たくない。涙を隠して「バンザイ、バンザイ」と戦場へ送り出すことなんて、絶対に出来ないだろう。

母はどんな時も人に頼ることもなく、あの辛かった戦時中でさえ気丈に振る舞っていた。人を頼りにしなければ生きていけない自分が情けない。今日まで私を支えてくれた子供たちと、(入所中の)ケアハウスのスタッフにはほんとに感謝の気持ちでいっぱい。兵隊さんは死ぬ時「天皇陛下万歳」と言ったそうだが、私は心をこめて「ありがとう」とお礼を言うてから死にたい。

さて、少し話しが逸れたが、私にはまだ誰にも話したことの無い秘密がある。知っているのは母と私だけ。死ぬまで言うまいと思っていたが、一人胸の奥にしまっておくのもしんどいので、思い切って書くことにする。

あれは昭和十七年の夏のこと。私は小学校の三年生だった。奈良の連隊へ入隊

した兄は、筆まめに母へ軍事郵便を送ってきた。ある日、私が学校から帰ると、一枚の葉書がポストに入っていた。

「〇〇日の××時に自分は奈良から中支に配属します。もう二度とお逢い出来ないとします。この時間までは面会できませんから、国鉄奈良駅の〇番線乗り場まで来て下さい」と書いてあった。私は急いで母に知らせなくてはいけないのかなと思いつつ、「まあいいか。母が帰って来てからでも間に合うだろう」と安易な気持ちで、その葉書を職場まで持って行かず、家に放置した。友達と校門で会って遊ぶ約束がしてあったのだ。

仕事から帰った母は葉書を見て驚いた。「今から行って間に合うだろうか」と慌てて支度をする母の様子から、私は初めて事の重大さを知った。大急ぎで母が出て行って行った後、私は「どうか間に合いますように」と、心の中で神仏に祈り続けた。自分の怠慢さをしみじみと嘆いた。

何時間かして、母は淋しそうな顔で帰ってきた。私は必死の思いで「兄ちゃんに会えた？」と聞いた。母は一言「逢えた」と言っただけ、何も言わなかった。

私は「ごめんなさい」と謝るつもりだったのに、母の姿を見てみると声を掛けることができなかつた。母は私を叱りもせず、ずっと無言だった。私は大きな声で叱られるほうが助かったのに、と思った。泣きもできず、ほんとに苦しい気持ちだった。ようやく母が話してくれた。

母が奈良駅に着くと、面会の時間は過ぎていたが、ホームには汽車が停まっている、兵隊さんの乗った列車は見送りの家族で一杯だった。その中を掻き分け、掻き分け、列車の窓の下を走りながら「〇〇、〇〇！」と叫んで探した。汽車はゆっくりと動きかけていた。

「ああ、お母さん！」と叫ぶ兄の声が聞こえた。汽車は少しずつではあるが動き出しているし、もう何も話せなかつた。兄が「お母さん、何か形見になるような物を！」と言ったが、財布以外は何も持っていないなかつたので、着物の帯に挟んだ扇子を列車の窓から投げ込んだ。「〇〇は上手く受け取ったかな」と母は心配そうに話した。

母が兄を見たのは、それが最後だ。「もう少し早かつたら」と、母も兄も思っていただろう。幼い私にはまだ罪の深さが分からなかつたが、成長するにしたがつて、後悔の念が重くのしかかるようになった。遺骨が帰ってきた時、もしかして扇子は入っていないかと、心から願ったものだった。

母は死ぬまでそのことは口にせず、三人の姉たちも知らないままだ。七十四年経った今も、私にとっては決して忘れられない悲しい思い出となっている。

お母ちゃん、兄ちゃん、ほんとにごめんなさい。私が早く母の職場へ葉書を持っていくべきでした。(続く)

今回は中国の古典「莊子」(外篇)のエピソードを取り上げたものです。原典は我々も手にとることができるので、比較してみるとなかなか興味深いものです。教科書に出ない度は二／五。

莊子、動物の振る舞いを見て、

走り逃げたこと(巻十ノ十三)

今は昔、中国に莊子(そうし)という人物がいた。頭脳明晰で物知りだった。

この人、道を歩いていると沢の中に一羽の鷺(さぎ)がいて、何かを狙って動こうとしない。莊子、この鷺を見て取ってやろうと思ひ、杖を手にして密かに近づくと、鷺は逃げようとしなない。莊子、これを怪しんでさらに近寄ってよく見ると、この鷺は一匹の蝦(えび)を狙ってじつと立っている。それで人が自分を襲おうとしているのに気づかないのだった。またこの鷺が取るうとしている蝦を見ると、逃げようとしなない。これもまた一匹の小さな虫を狙って、鷺が狙っているのに気づかないのだった。

そのとき莊子は、杖を捨てて逃げだした。

思うに「鷺と蝦たちは、自分が危機にさらされていることに気づかないで、それぞれが他の者を獲物にする事だけを考えている。自分も鷺を打ち取ろうとするあまり、自分以上の者がいて、自分を獲

物に狙っているのに気がついていないのだ。だったら逃げるにこしたことはない」と考え、走り去った。これは賢いことだ。人はそもそもこのように考えるべきなのだ。

※ ※

また莊子、妻とともに水の上を見ていると、水面に大きな魚が浮かんで遊び泳ぐ。妻これを見て言う。「この魚は、きつと何かうれいことがあったんだわ。うれしそうに泳いでいる。」莊子、これを聞くと「おまえはどうして魚の心がわかるんだい」と。妻これに応えて「あなたはなぜ、私が魚の心を知っているか知らないかを知っているのですか」と。莊子、このとき曰く「魚でないので魚の心はわからない。私でなければ、私の心はわからない」と。これは賢いことである。実に、親しい間がらといえども、人が他の人の心を知ることはない。

このように、莊子はその妻も心賢く深く悟っていたと語り伝えられているそうだ。

《コメント》

中国の古典「莊子」の中に出てくる二つのエピソードです。「莊子」劈頭の壮大なイメージのエピソードとともに、この二つとも私の大好きなエピソードです。で、この「今昔物語集」の記者と気が合うなあと思ったことでした。第一のものは、「自分以上の者」の存在の不気味さと

恐怖を喚起しています。また生物界の食物連鎖の階層性を連想させるとともに、さらに深い何かを暗示しているようにも

思え、想像力を刺激します。また二番目のものは、他者の心を理解することの可能性という哲学的に深い洞察のように読めます。この問題は極めて現代的で実際のでもあります。もともと、原典での内容は少し異なっているようでもありますが・・・この会話、原典では実は会話の相手は妻ではなく、莊子の友人でもある論理学派の論客・恵子(けいし)であり、これは男性です。恐らくここではこの記者は(ないし記者の属する文化的サークルでは)、「恵子」という名前から、これが妻だというごく初歩的な誤りを犯していたように思われます。またはじめのエピソードでは、ここで「鷺」とされるものが、

原典では奇怪な大きな鳥(カササギ)とされていることからしても、当時「莊子」を日本人向けにわかりやすく翻訳してリライトしたハンドブックのようなものが存在していたのではないかと想像させます。この二つのエピソードは原典というより、その翻訳を種本にして書かれたものと推測できるのではないのでしょうか。なお参考までに「莊子」劈頭の、私の大好きな一節を以下に掲げておきます。「北方の暗い海に魚が棲み、その名を鯤(こん)と言う。その大きさは何千里なのか見当がつかない。鯤は変身して鳥となり、その名を鵬(ほう)と言う。鵬の背の広さは何千里あるのか、これも見当がつかない。鵬が動き飛び立てば、天を覆い垂れ込める雲のようである。この鵬が海のうねり初めるころ、南の彼方、暗い海に渡って行くとする。南の暗い海とは、天の果ての池である。」云々。

この圧倒的なイメージに私はすっかり「莊子」という古典のファンになってしまったのでした。



明石 幸次郎

M井に連れて行かれた二軒目のキャバレーのような店で遅くなって、気が付いた時は電車がなくなつてしまつていた。仕方なくタクシーに乗つて、運転手に行先を告げ、近くに來たら、起こしてくれるように頼んだ。車の振動が心地良く、直ぐにとうとうとして、眠りに落ちた。十五分程したら、「お客さん、近くに來ましたよ！」と運転手の声で起きて咄嗟に、窓の外を見ると地下鉄の表示らしきものがあった。すぐに、左に曲がつてと告げると其処から五分足らずで、停めて貰い、料金を払つてタクシーから降りた。空を見ると満月が煌々と夜空を照らしていた。何とか、階段を上り、住宅の玄関ドアのカギを開けて、明かりを点けて部屋に入つた。ぐっすり寝ている家族に氣を遣いながら、台所の電気を点けて、今日買ったカバンに名刺入れだけを追加して入れた。テーブルの上には、妻のメモがあり、「明日は早いので冷蔵庫にサンドイッチが入つているので、新幹線の中で食べて下さい」と書いてあつた。シャワーを浴びて、四時四十五分に目覚まし時計のタイマーをセットして布団に潜り込んだ。M井は「自分が自分らしく生きるために辞める」と言つたが、「会社に居たら、自分らしく生きられないのか？ そんなことは、無いはずだと考えていたら、

直ぐに眠たくなつて、眠りについた。

目覚まし時計のリンリンリンという音で、遅刻したら大変だと飛び起きて、直ぐに、着替えて、洗面所で顔を洗い、歯を磨いていたら、寝室から女房の音が聞こえ「メモ見てくれた？ サンドイッチ忘れたんといつてね」と念を押された。「分かつた。今晚は、歓迎会だから遅くなるよ」と応えたら、「先週から毎晩、毎晩、送別会で遅くなると言つていたら、今週は毎晩、毎晩、歓迎会なんやね。身体に氣を付けてね。お酒が弱いのに。行つてらっしゃい！」と苦言を呈された。忘れかけていたサンドイッチを冷蔵庫から牛乳と一緒に取り出し、サンドイッチを鞆に入れてから、牛乳をコップに注ぎ、一気に飲みほして「分かつたよ。行つて来ます」と玄関まで歩き、靴を磨きながら応えた。靴を履き、玄関の古びた鉄のドアを開けた。カバンを小脇に抱え、階段を下りて、薄色に明けて來た空に向かい、大きな欠伸をして、地下鉄の駅まで小走りで向つた。

地下鉄の改札で、寝たそうに欠伸していた駅員に切符をみせて、階段を降りてホームに着いた。ベンチに座り、電車の到着を待つ間、目をつぶりながら昨晩の行動を思い出そうとした。

M井と昨晩飲んで、一軒目は明石が案内した店なので、勘定を払つたところまで記憶しているが、その後は、はつきり覚えていなかったが、一軒目の店を出て

から、まだ、十時で早いという事で、M井と肩を組みながらフラフラと歩いていたら、派手な服を着た若い女の子に呼び止められた。M井がその娘と何やら話をして交渉が成立したのか、にっこり笑い返し、明石の腕を引っ張つて、女の子に案内されて、店に入つていった。店の中は耳をつんざく大音響と、眩いばかりの照明で照らされステージがあり、あちらこちらにボックス席があつた。二人は直ぐに、ボーイに隅の方にある照明が暗くなつたボックス席に案内された。

二人が座るや否や、厚化粧をした、透け透けのドレスを着た女の子が2人、M井と明石の横に座つた。続いて、さっきのボーイが、ウイスキーのボトルと水割のセットを持つて來て、次に何か注文は、と聞かれた。M井は何回かこの類の店に來たらしく、落ち着いた態度で、二人の女の子のリクエストを聞いてから、三品ほど注文した。M井の横にいた女の子が「何かお作りしましょうか？」と聞いたので、M井は「そうか、何でも出来るんか、お姉ちゃんは？」と笑いながら質問をした。「いえ、ウイスキーの水割りか、ストリートか、オンザロックか、お湯割り位です」と答えると「そうか、四つも出来るんか？ 大したもんだぞ。その中で、得意なのは、なんぞな？」「えー、お客さん

広島出身ですか？ オンザロックが得意です」とおどけた調子で応えた。「アంతも広島の出身なんか？ どこぞ？ わしや、

尾道の近くの島じゃけん。島では、ワシはオンザ祿でなしー？ あー、わしや、祿で無じやので、オンザロック頼むけん！」と笑いながらリクエストしたので、女の子はリラックスしたのか、「わたしは、福山の方です。こちらの方のお客さんは？ 何されませうか？」と明石に聞いてきた「そんなら、俺も、この人以上に祿で無やと言われるのじゃが、水割りにしておくわ」と言つて、たわいない話をしあつた。二人の女の子には、ボーイがジュースらしき飲み物を持つて來たので、四人で乾杯となつた。その後も、M井が冗談を言つて、二人の女の子を笑わせて一生懸命、場を和ませようとした。

「今日は、お二人は何か特別なことでもあつたんですか？」と明石の横にいて、取り澄ました感じの女の子が聞いたので「この広島出身のお兄さんが会社を辞めると言うので、引き止める為に今晚は酒を飲んで説得をしている特別の日なんや？」「それにしては、お二人共、明るいですね」「そうや、堅苦しい会社から解放されるので、肩の荷が下りて、ほっとしているんやなあ？ 残る方は、寂しいもんや。それに、もう説得しても無理なので、止めたんや」と質問した女の子に応えたら、「会社と云うところは、そんなに堅苦しいところなんですか？」

と又、質問してきたので「この人がいる部署が人事部というところに居て、この人を除いて皆が自他共に会社を代表する

選ばれた社員だと思っているの、この人みたいには選ばれた社員だと自分で思っていない人は、周りのとの違和感を感じてしまい、堅苦しく、窮屈に感じてくるんやろなあ」と応えたら、M井は「そんなことでは、無いんでなあ〜ワシはただ、こう見えてもアンタと違って、繊細な神経を持つてるんじゃけん。周りに気を遣い、周りに合そうとする自分と、そのままの自分と葛藤をしていたんじや。まあ、この辺で、そのままの自分でおりたい気持ちが強くなったんでなあ。わしは、大人になれない、組織に馴染まない、田舎もんじやでなあ」と思い出したところで、始発電車がゴーと言う音をたててホームに滑り込んで来た。

II うたのつぼ II

こんな時にこんなひと言が……シチュエーションと和歌・短歌・俳句・漢詩の併せワザをこ

紹介

主流派に同調せず、異論を挟むなど微妙に意地を張りたい場合、「○○は××とは、何思いきん」などと言ってみる。

「京は和菓子と何思いきん、シユークリムやロールケーキだつてけつこう美味しい店があるんだだけどね」

「オリジナル」

『新古今和歌集』春歌上

見わたせば山もとかすむ水無瀬河

ゆふべは秋となに思ひけん

後鳥羽院

五月待つなんとやら

大江雉鬼

五月さつき待つ花橋の香をかげば

昔の人の袖の香ぞする

古今和歌集卷第三夏歌、詠み人知らずの一首。古今和歌集は一般にもよく知られている古典作品だと思いが、その古今集に入っている和歌を訊ねられて数首すらすらと出てくるのは、古典文学に対して幾らか専門的に関わった人になるのではないだろうか。百人一首の歌を最初の方からランダムに挙げておけば、かなりの確率でヒットするという裏技はあるにせよ、知っているかどうかという基準でいえば、古今集という歌集の名前は知っているても中身は覚束ないというのが大多数かと思う。そんななか、百人一首所収歌を除いた上でなおかつ比較的知られているクチに入ってくるのが先に挙げた「五月待つ」の一首である。

この詠み人知らず歌が、なぜ有名になったかは分からない。しかし伊勢物語ではこの歌をモチーフにした短い物語が作られていること、源氏物語でもこの歌が喚起するイメージを属性として与えられた登場人物が出てくること、さらには時代がくだつて本歌取りが基本的な作法になつてくると元歌（本歌）の定番になること、などなどを思えば、古今集二十巻千百首のうちの一、すなわち千百分の一というだけでは説明できない。前振りはこの程度にしておいて、この

「五月待つ」の歌が今回のお題になるのだが、この歌が頭を過ぎつたのは、単に五月が近づいてきて、五月待つの季節かな？と思っただけのことである。歌の内容に立ち入るなら橋の香りが契機となつてかつての恋人を思い出すという流れがある。だが、そこまで踏み込まずに単に文字面の繋がりで、五月になるから五月待つ、たったそれだけの展開で浮かんだに過ぎない。言ってしまうえば脊髄反射的な連想ゲームなのだが、そうした反応を呼び起こすくらい「五月待つ」というフレーズが世の中に浸透しているということである。

ある言葉ないしフレーズが世の中に入られるためには、まずは出典とおりの使い方が広く受け入れられるところから始まる。お題に即するなら「五月」なつて花開く橋の香りを嗅ぐと、昔親しくしていたあの人の袖の香りが漂ってくる気がする」という内容が共感を得るということである。モノの本によれば、橋の花はホトトギスとともに懐旧の思いを助長する景物として扱われるという。ホトトギスが人里に現れて、その声を聞かせるようになるのは夏の初めとされているので、その頃に花開く橋にも同様の属性が付されたのか、それとも順序が逆なのか、そのあたりの跡付けは難しいが少なくとも古今集の時代には橋とホトトギス、その両方に昔をふり返らせる作用が認められるようになっていた。これらの前後関係の整理ができないのと同じように「五月待つ」が作られた年代の絞り込

みも、史料の限界によって不可能と言わざるを得ない。それでも古今集が編纂される頃には、ホトトギスと橋の懐旧作用は普遍的なものとして認知されており、それを言語化したものが「五月待つ」の歌だったということではある。

このように古今集以前の姿はともかくとしても、古今集以後になると「五月待つ」は固定したフレーズとして広まっていく。最初の頃は出典に忠実な使われ方なので懐旧の思いと結びつくのだが、その束縛が次第に薄れてきて「五月待つ」だけの一人歩きとなるのは容易に想像できる。使い方が間違っているとお叱りなどものともせず、「五月待つ」が五月の景物に対する枕詞のようになって広まっていくということである。

和歌でなくても後世の俳句や川柳、あるいは散文の世界で「五月待つ」と始めながら懐旧とはまったく関係の無い事例を続けているものがあれば分かりやすい事例になるのだが、手許には生憎ながらそのサンプルはない。しかし、今回の発端がそうであったように、五月が近づいてきたからというだけで「五月待つ」を思い浮かべてしまったのは紛れもない逸脱的用法である。伝統を基準にすれば間違いであり、誤用であるのは動かない。だが、この枕詞的な使い方を一方的に否定するのではなく、逸脱も含めて言葉が使われ続けるなかで変容していく過程と見なすのなら、広く言葉の生態と呼んでもいいように思う（もっともこうした逸脱を逸脱と認知した上で意図的に使うパ

ターンと、そうでないパターンは厳しく区別すべきと考えている。

ところで、一般に言うところの流行語なるものも、突きつめればこれらとよく似たパターンで広まっていると言えそう。発信源がテレビの番組であれCMであれ、あるいはアニメの主人公が発するセリフであっても構わないのだが、最初はストーリーなど本来の使われ方に即しての共感、すなわち物真似の域で喜ばれる。それが少し進むと微妙にずらした形がもてはやされる。幼い子供がセリフや仕草の上っ面を真似るだけで喜んでるケースなど、物真似の域をいつまでも脱することのないものもあるので、時系列風に扱えないのは重々承知だが、モデルパターンで示すのなら物真似から逸脱へという図式は認められる。その後で、それが一時的な流行で終わるのか、逸脱が新たな命を吹きこんで連続と生きながらえていくかは各々の事情による。いずれにせよ、物真似から始まって逸脱をくり返しながらか生きながらえていくことができる、おのずと世の中に定着していくのだろう。流行語という括りで扱われるとすれば、複雑な生態の一面面が切り取られた時だけのことであり、視野を広げて長い目で見るなら、テレビやアニメなどといった、その出自に縛られて価値判断を下すことなど、何の意味もないことである。つまり、次々に生み出されては消えていく言葉ないしはフレーズの消長を辿ると変わらない、かなり複雑な話になってくる、ということである。

埋め草

死後の世界、地球外生命体、失われた古代文明等々、これらのトピックは何かと人心を刺激しやすい。カナダに住む十五歳の少年が、独自の理論を用いて、マヤ文明のまだ知られていない都市遺跡を発見したというニュースは、燎原の火のごとくネット界隈で拡散された。しかも、驚きと賞賛をもって拡散された直後に、発表された内容に対する信憑性が取り沙汰されたり、そうした反論を辟みやっかみによるものだとするブーイングが起きたりと、いろんな意味で騒々しいこととなっている。

いくつかの問題が絡み合っているように、流れの整理をしておく、新発見のニュースが最初に駆け巡ったのは五月八日のことだったようだ。「ケベックの十五歳が、衛星写真とマヤの天文学と彼の直感を用い、マヤ文明の都市の位置に関する謎を解決、さらに新しい都市遺跡を発見した」という書き出しで速報が流された。このニュースに多くの人が飛びつき、十五歳の偉業は一両日中にインターネットを介して世界中を駆け巡った。このニュースが世間の耳目を引いたのは、主体が十五歳の少年だったこと、発見に到るプロセスがまったく独自のものだったことなどの要素が少なからず絡んでいるようだ。既存の手法に則った蓋然性の高い推測に基づく発掘調査を高名な考古学者が行った末に発見されたのであれば、これほど話題にはならなかったと

思う。それだけに、今回の発見をジャンク・サイエンスと呼んで冷静な対応を呼びかける専門家の声も、一部の熱すぎる応援者に掛ければ、専門学者の偏屈と縄張り意識によってロマンと若い才能が圧殺される構図であるかのように吹聴されている。

確かに「発見」とは言いながら、衛星写真に捉えられた人為的構造物めいたものの影が指摘されているに過ぎないし、「独自の手法」にしても、マヤ文明で用いられていたとされる星図の信憑性が疑問視されるのであれば、結局のところは数ある仮説の一つに過ぎない。信憑性の高い低いを問わないのであれば、この手の仮説は掃いて捨てるほど提出されているはずだ。

もちろん、独自の勘と信念によってトロイの遺跡を発見したシュリーマンのような事例もあるのだから、ハナっから一笑に付するのはよくない。しかし、だからといって、熱すぎる応援者のように学者は偏屈なもの決めつけてしまうのも、裏返しの偏屈さが発露されているにすぎない。大衆向けの科学誌である「ニュートン」の編集部も今回の騒ぎには一枚加わったようだが、公式ツイートでは「元ニュース記事やカナダ宇宙庁のTweetなども確認できたため、ガセネタではないと判断し、紹介しましたが、真偽を見分けるのはとても難しいものです。また進展がありましたら、追って報告致します」という形での幕引きを図っている。ともあれ、今回の一件は大衆受けしや

すい要素がてんこ盛りのシチュエーションだっただけに、外野が過剰に騒ぎすぎたケースと見ておいてよさそう。日本の科学畑でも似たようなことが最近起きたように記憶しているが、それはさておき、調査隊を送ることもできないとされるジャングルの奥が発掘の対象となった時、この十五歳の仮説が予言として脚光を浴びたとすれば、それはそれでまた別なドラマになるに違いない。

(C)

編集後記

おかげさまで大峰山を楽しんできました。計画の半分も行けませんでした、十分に霊峰の精気を頂き元気になった気分です。初めて山上ヶ岳に登り修験道の雰囲気味わい感銘を受けました。この想いを「大峯奥駆道」という連載で綴っていきます。やはり修験道の開祖、役行者は偉かったですね。けわしい尾根筋に道を開いたんですから。

奥駆道には、独特の雰囲気漂っています。大変魅力的な道で、何度も歩いてみたい残りました。

幼友達、ガンで余命が半年と言われて京大病院に入院しています。当分の間、見舞いに通うつもりです。元気で生きていくことの有難さをしみじみと思えます。

(嘉)

我が愛犬

犬は飼い主に似るといいうけれど、私のどこに似たのかわからない。

大ざっぱに見えるようだけれど、いたって小さな自分だと思っているのだが。

犬と一緒にいる時は、却って安心してスラスラとペンが走る。途中訪問者があつても、又もとの席でペンをとる。そして思わず、ヤレヤレと大きな声になり、時には、ため息ともなる。

犬は、不思議そうに私を見る。気をつけていると犬のため息はきわめて短い。

フツとかハツとか、ただ息をはずませただけのように聞こえるが、短くてもため息は、ため息である。犬を連れてというよりも、犬に引かれてという方が正しい。ちよつと待って…と公園を駆けずりまわる。ここらで一休みしようと思ふやうに風景に見とれているバアさんを見て「おばちゃん、さわってもいいかな」ひい孫くらいかなア。犬は、フツとため息をつく「さわったらダメといつてく

れよ」グスツと笑う。もうボツボツ帰ろうかなあ、犬はそつぽを向いて風に吹かれてすましている。こんな時の愛犬のクールな横顔は悪くない。

呼ぶ声がする

部屋の前を歩くと私の亡き両親の写真を飾っているのだが、どうして私の手元にあるのか浮かんてこない。

実弟に話しても笑いにまぎれてしまう。父母が亡くなつて三十有余年。

写真を前に手を合わせることもなし、ぐちることもしない。でも、しばらく目を閉じていると不思議に気持ちが落ち着く。

朝の行事、仏殿にお供え。離れると、いつの頃からか時折、実父母の写真を見つめる癖がついた。孫二人を囲んでうれしはずなの、父も母も見方によっては愁いの顔に見える、いや、あまりのうれしさに、はにかんでいるのだと思う。

写真を見つめる私は九十歳をむかえ、写真の中の父・母は、日に日に若返つてくる。

曇りのち晴れ

とにかく焦ると人間の能力は想像以上に著しく低下してしまうみたいだ。

まずは、ひと呼吸、落ち着くには呼吸を整えるのが一番の早道。

すーっ、はーっ、ほらね。孫からの電話でまた一呼吸。

「春に三日の晴れなし」と言われるように、春は天気や気温の変化が大きい。コロコロと変わりがち、人間の身体も突然変異を来すもの、ご用心、ご用心。

今が旬のタケノコは、雨の後にニョキニョキと顔を出すことが多く、大きなトンガを肩に父の後について竹やぶへ行つたことを思い出す。

友達から、タケノコでケーキをつくったと可愛らしいのを送って下さった。あまりの勿体なさど手作りの苦勞を思うと、

早速というふうになれず、二人三人の集まりへ持参。貴重な話題となり、栄養源となった。

ありがとう。感謝。たけのこで想い出が、心の中で生きていて、心の枯れ木にも、一瞬で花が咲く。

俳句

交番に机が二つ燕来る
土田 裕

風音のしきりなるかな
青葉山

一日に

一句を目指し夏の雲

柿若葉

万歩の疲れ癒しけり

夏木立

日ごと夜ごとに色深め